

異世界

料理で王国の胃袋を掴みます!

# 日帰りごはん

3

Chikki

ちっき

illust. 薫る石

**ロイロ**

ドラゴン。契約により、  
千春と魂が  
繋がってしまう。

むか い より こ  
**向井頼子**

千春の親友。  
異世界ものが  
大好き。

**アイトネ**

女神。  
千春と日本のお菓子を  
気に入っている。

**ユラ**

はっ きんもつねどく  
白金狐族の  
女の子で、  
千春の義妹。

ふじ い ち はる  
**藤井千春**

本編の主人公。  
17歳、高校生。  
ジブラロール王国  
国王夫妻の養女に  
なった。

**ルプ**

日本の神社の  
土地神様。  
実はフェンリル。

登場人物紹介 

## 第1話 レイクサーペントの照り焼き！

ある日突然、十七歳の藤井千春の自宅のクローゼットと異世界の王宮が繋がってしまった。今のところ千春限定ながら、行き来も持ち込みも自由自在。これをきっかけに、千春と異世界の人々との交流が始まった。

千春は王妃に気に入られ、国王夫妻の養女となる。また、海外に長期出張していた実の父の大樹も年末年始のこの時期は日本に戻ってきており、千春に連れられて異世界で国王たちと楽しくお酒を飲んでる。

そんな千春たちは今、王家の別荘があるクレア湖に来ていた。みんなでバーベキューをしていると、匂いにつられてドラゴンがやってきた。このドラゴンは、千春によってロイロと名づけられ、彼女の眷属になってしまう。

さらに、ロイロの知り合いという女神アイトネもやってきて、千春と地球のお菓子<sup>かし</sup>に気に入った。アイトネはいつでも千春に会えるようにするため、彼女にスキル『神託レベル10』<sup>しんたく</sup>を勝手に与える。このスキルを貰うと、『聖女』<sup>せいじょ</sup>の称号がもれなくついてくるのだが……

「あつの女神いいい！ アイトネええ！！！！ 何よ！ 『聖女』 って！！！！！！」

「チハル、どうした？」

女神がいなくなった空に向かって叫ぶ千春に、ジブラロール王国の第一王子エンハルトは声をかけた。

「ハルト兄様あ、アイトネがいらぬ称号つけてくれたあ……」

「なんの称号だ？」

「聖女」

「……はあ、もう驚かんぞ、俺は」

「どうしよう？」

「黙ってればいい。王女殿下に鑑定をかけるバカはいないだろ。俺もかけられたことはないからな」

「そっか！ 言わなきゃいいんだ！」

「ただ父上と母上、タイキ様には言っておけよ？」

「なんでよ」

「びつくりするからだ」

笑いながら、エンハルトは千春に答える。

「まあ冗談はさておき、聖女というのは場合によっては国王よりも立場が上になる。公表すればチハルの地位がぐっと上がるんだが……必要ないな。とりあえず、帰ってから父上と相談しよう」

「そうだねえ、なんか面倒が増えたなあ」

「何を今さら。チハルに何かついたらとこで変わらんだろ」

二人が話をしていると、横から千春の侍女のモリアンが話しかけてくる。

「えっとー、異世界人で、第一王女殿下で、聖女と言われて、名実ともに聖女になって、ドラゴンと契約してる？」

「あと、女神様とお友達でお話ができますね」

もう一人の侍女、サフィーナが呆れたようにつけ加えた。

「聞くところでもない人物だな、それが俺の妹か」

エンハルトもハハハと呆れるしかなかった。

「チハルおねえちゃんは、ユラのおねえちゃん！」

千春の義妹である白金狐族のユラが声を上げる。

「そだよー、ユラのおねえちゃんだよー」

ユラはテコテコ歩いて千春に抱きつく。千春も抱きしめ返した。

「チハル、喉が渴いたぞ。何か飲みものをくれ」

今は少女の姿になっているドラゴンのロイロが言った。

「へいへい、ロイロって嫌いなものはある？」

「チハルが口にするものならなんでも食えると思うぞ」

「了解、それじゃ別荘に入ってお茶しよ。私もケーキ食べたいし」

「まだあるのか？ 僕も食べるぞ」

「さっきたくさん食べたじゃん」

「まだあるなら食べる」

「へいへい、ライリー！ フィンレー！ 一緒にお茶するよー！」

千春は少し離れたところで様子を見ていたエンハルトの弟二人に声をかけ、別荘の中に入る。

「さて、それじゃ日本のケーキは残り少ないので、一人一個ねー。お代わりは料理長のルノアーさんのくれたケーキねー」

みんなは、千春とサフィーナが出したケーキでゆっくりお茶をしたり、水遊びをしたりして夕食までの時間を過ごした。

★

「チハル王女殿下、夕食のご準備ができました」

侍女の一人が千春に声をかける。

「はい。ユラちゃん、行こかー」

「はいい！」

二人が手を繋いで外に出ると、侍女と近侍がすでに肉を焼きはじめていた。

「おー、全部やってくれてる」

「そりやそうだろう。昼のようにチハルがやるのが間違ってるんだからな」  
やってきたエンハルトが言う。

「いいじゃん、楽しいから」

「そう思っつて、俺も言わなかったんだけどな」

エンハルトは、千春が楽しそうに料理する姿を見るのが好きらしい。

やがて焼けた肉を各人が食べはじめた。千春はオークの肉に手を伸ばす。

「オーク美味あ」

「僕にもくれ」

ロイロが千春にねだった。

「ほい。他にコカトリスもあるよ」

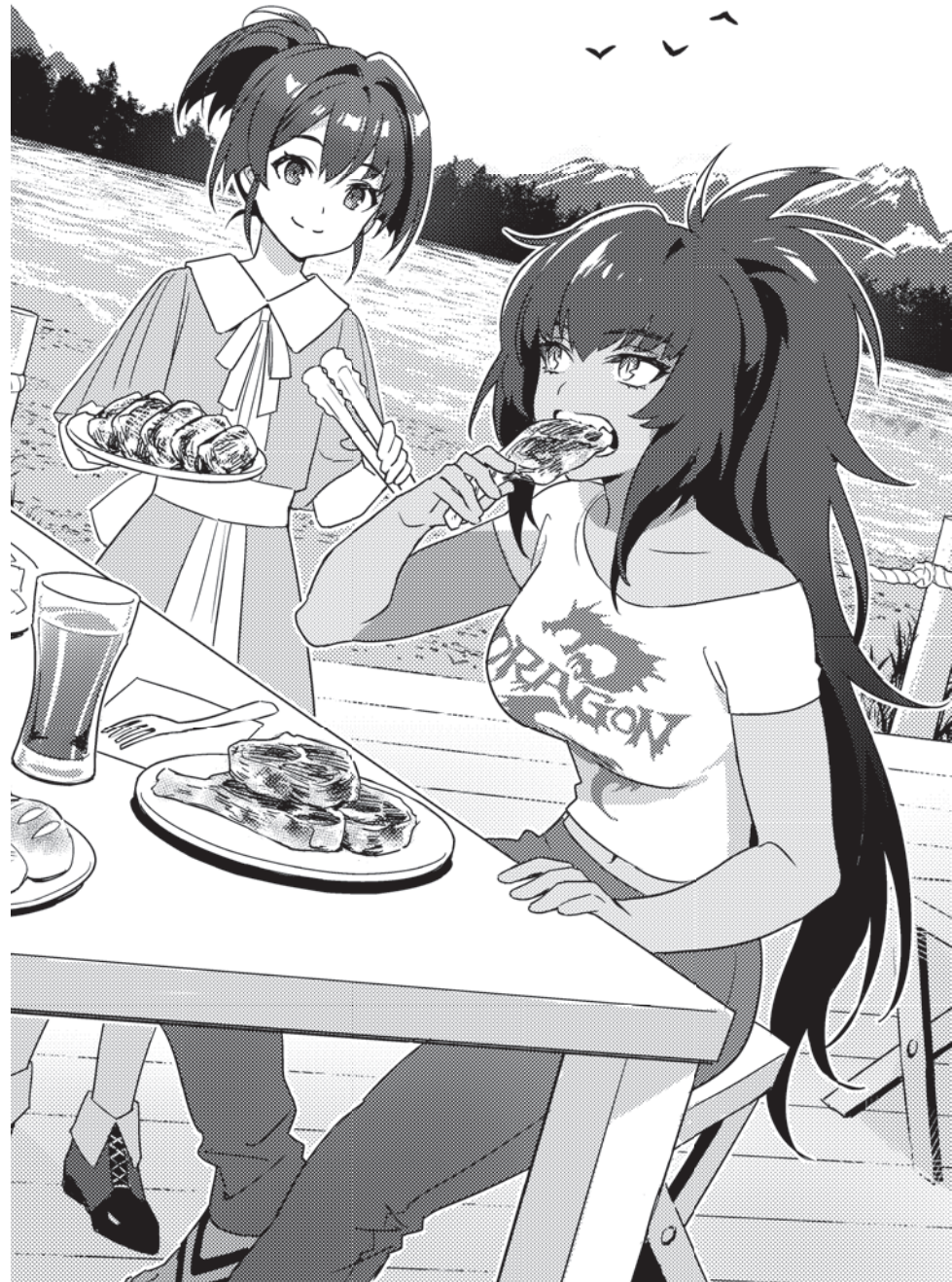
「ほう？ それも貰おう」

相変わらず人の姿で肉に齧りつくロイロを見て、千春は微笑んだ。

「ロイロがレイクサーペントを獲って帰ってきたとき大きかったじゃん、あれ魔法？」

「ああ、魔法で成獣サイズまで体を大きくさせた」

「あのサイズが大人なのか。そういえば、他のドラゴンはいないの？」



「いるぞ？ 南の山に集落がある。儂はそのさらに奥の集落で生まれた」  
「帰らなくていいの？」

「好き勝手に生きてるからなあ。別に構わんな」

二人はテーブルについてモグモグと食べながら、ドラゴンの集落の話が続けた。

「チハル、レイクサーペントを塩焼きにしてみました」

サファイーナが千春に新たな料理を差し出した。

「ありがとう」

千春は一口サイズのレイクサーペントをパクツと食べる。

「……んー、ササミっぽいけど胸肉に近いな。臭みもないし美味しい」

すつと立ち上がった千春は、肉のあるテーブルに向かう。そして、アイテムボックスから調味料を出す。

「よーし、照り焼きでも作るか」

サーペントを一口サイズに切り、塩コショウをかけ片栗粉をまぶす。

「チハル、手伝うわよ」

「あ、サファイー。それじゃ、これちょっと油多めで炒めてくれる？」

千春は片栗粉をまぶしたレイクサーペントをサファイーナに渡し、自分は調味料を混ぜる。

「醤油〜みりん〜お酒〜砂糖〜はちみつ〜」

全部同じ量で混ぜ合わせる。

「チハル、こんな感じかしら？」

サフィーナがフライパンのレイクサーペントを千春に見せた。

「うん、いい色。それじゃこの調味料を入れるから、水分が半分くらいになるまで炒めてね」

千春はフライパンにそのまま調味料を流し入れる。

じゅわあああああ！

「なんじゃ、すごい匂いがしておるぞ？」

「ロイロ、嗅ぎつけるの早すぎでしょ」

「チハルおねえちゃん、美味しそう！」

「ここにも鼻のいい子がいたわ」

千春はクンクンと匂いを嗅ぎに来たロイロとユラにも、お皿を用意する。

「チハル、できたわよ」

「ほい。サフィー、それじゃこのお皿に入れて」

レイクサーペントをお皿に盛りつけ、最後にゴマを上からパラパラとかける。

「はい！ 照り焼きチキンつばい、照り焼きレイクサーペントできあがりー！」

「わー！」

「美味そうじゃー！」

ユラとロイロが嬉しそうに叫んだ。

「作り方は簡単だし肉もあるから、もつと作ってもらおう」

千春がそう言うと、侍女たちがすぐに肉を切りはじめた。

「それじゃ、これは私たちが食べよう。いただきます」

「いただきます」

千春、ユラ、サフィーナ、そしてちゃっかり横にいるモリアンが食べ出す。

「いただきます？」

ロイロが首を傾げた。

「食事前の挨拶だよ。食材と、料理を作ってくれた人に感謝をして食べる挨拶」

「ほう、それではいただきますじゃー！」

ロイロもフォークで刺し、レイクサーペントをパクリと食べる。

「美味あーい……！……！」

モリアンとロイロが叫ぶ。

「兵士さんたちも食べないかなあ」

千春が兵士の方を見ると、町の人が数人来ていた。

「どうしたの？」

千春はすぐ近くにいた第一騎士団長のエーデルに声をかける。

「どうやら町長らしいですな。レイクサーペントのお礼のようです」

「へえ、お礼なんていいのね。余った肉だし」

すると、町の人たちが千春の方へ歩いてきた。

「私は、この町の町長をしているクラガンと申します。王女殿下、この度は貴重な肉をいただき、ありがとうございます」

「いえいえ、お気になさらず。この量ですので、余ったものですから」

「ありがたういただきます。お礼と言ってはなんですが、こちらをどうぞ」

町長の後ろにいた人たちが、持ってきた樽を差し出した。

「これは？」

「エールとワインでございます。もしよろしければ、宴にお使ください」

「ありがとうございます」

「あと、こちらもどうぞ」

そうして差し出されたのは、果物と、先ほどのものよりも小さい樽だ。

「この近辺で栽培している果物とその果汁でございます」

「おー！ ありがとうございますー！」

お酒が飲めない千春やユラは、こっちの方が嬉しい。

「では、明日改めてお礼を」

「お礼なんていいですよ。この品々をありがとうございますね」

町長は恐縮しながら去っていった。

「でも、お酒多くない？」

「そうですねー。兵士に飲ますわけにもいきませんし」

千春に言われ、エーデルも腕を組んで考える。そこへ、ロイロがひよいと顔を出した。

「なんじゃ酒か？ 儂が飲むぞ」

「いや、ロイロが飲むにしても多すぎでしょ。持って帰るかー」

「兵士は飲まんのか？」

「仕事だから飲めないってさ」

「見張りか？ 結界でも張っておけば危険はないじゃろ」

「結界張れるの？」

「張れるぞ」

ロイロがブツブツと呟き手を上にかざすと、半円状に建物ごとうつすらと光る膜に覆われた。

「すごっ、ドラゴンってこんなことできるの？」

「ドラゴンの能力ではない。儂が昔使っていた結果魔法じゃ。これで魔物どころか人も入れんぞ」

「へえ。そういうことらしいよ、エーデルさん」

「ふむ、では最低限に兵士の見張りを減らして、後は飲ませても問題ないか」

「飲めない兵士さんにはお土産でお持ち帰りね」

エーデルは兵士に声をかけ、酒を持っていかせる。そして肉も貰い、宴会を始めた。

「チハル、レイクサーペントを食べたが美味しいな」

「ハルト兄様もお酒飲んだら？」

「ああ、そうだな。少し貰おうか」

千春は持ってきたウイスキーをアイテムボックスから出す。すると、ロイロが興味を示した。

「なんじゃそれは」

「日本のお酒、ウイスキーだよ」

「儂にもくれ」

「いいよ。でも、飲んで暴れたら、アイテムボックスに閉じ込めるからね」

「これくらい酒で儂は酔わぬわ」

飲み方を知らない千春は、瓶ごとエンハルトとロイロに渡してから、果汁の入った樽を持ってユラのところに行く。

「ユラちゃん、食べてるかーい」

「チハルおねえちゃん、これ美味しい！」

「レイクサーペントの照り焼きだよ」

千春は樽から果汁を注いでユラに渡す。

「オレンジっぽいけど混ぜてあるのかな、他の果物の味もする。美味しいわ」

オレンジジュースっぽい果汁を飲みながら、千春もレイクサーペントを食べていく。

「チハルさん！ これあっちでも作れます!？」

「モリー、作れるよ。鳥の胸肉に近いからね。鶏やコカトリスなら、似たような感じになると思うよ」

「これは癖になる味です。たまりません！」

「そんなモリーにいいことを教えてあげよう。パンにこの肉とマヨを挟んで『照り焼きサーペントバーガー』にすると超美味しいよ」

モリアンはすぐさま立ち上がり、サファイーナに声をかける。

「サファイー！ マヨない！ マヨー!!!」

「あるわよ」

「出して！ あとパン！」

「はいはい、銀貨一枚ね」

「ちよっ！ ええええ!!! お金取るの!？」

「冗談よ、はい」

サファイーナはアイテムボックスからマヨネーズの小瓶とパンを数個出す。パンはハンバーガーにできるちょうどいいサイズだった。

「サファイー愛してる！」

モリアンは早速パンを切り、ハンバーガーを作る。そしてバクつと齧りつく。  
「……美味ああああああああああああああああああ！ 痛ああああい！！！！」  
叫ぶモリアンに、サフィーナのチョップが炸裂した。  
「久しぶりにサフィーのチョップ見たわ」  
「モリーおねえちゃん、いたそう」  
千春とユラは、痛さでうずくまりながらも照り焼きバーガーを食べるモリアンを見て呟いた。  
「美味しいです……ぐすつ」

## 第2話 空を飛ぶ！

「はあー食べすぎたわー」

「そうですね。もう少し休んだら湯浴みしますか？」

「うん。でも、この別荘にお風呂あるの？」

「ありますよ。当たり前じゃないですか」

「そりゃそうか」

夕食後、千春がソファで寛ぎながらサフィーナと話をしていると、ロイロが話しかけてきた。

「僕もこの家で寝ていいのか？」

「そりゃいいでしょ。もう私と家族みたいなもんでしょ？」

「チハルがそう言うならそうなんじゃろうな」

ロイロは嬉しそうに笑っていた。

「ドラゴン殿、明日は王国に戻るのだが、もちろんついてくるんだよね？」

一緒にいたエンハルトが、ロイロに問いかける。

「ああ。王子殿、僕のごとはロイロで構わんよ、チハルの兄なのだろう？ もちろんついていく。

チハルが逝くまで一緒にじゃ」

「俺のこともハルトでいい。そうだな、ロイロの件は父上に相談する。一緒にいられるよう話をつけておくから、チハルを守ってやってくれ」

「もちろんそうするつもりじゃ。なあ、チハルよ」

「お好きなように」

「チハル、湯浴みに行きましょうか」

サフィーナが声をかけてきた。

「ほいよ。浴室は広いの？」

「はい。王宮のお風呂と変わらないくらい広いですね」

「よし！ ロイロ、お風呂行くよ。サフィーとモリーも一緒に入ろう！」

「ええ、今日は王宮の侍女がいませんから、私とモリアンで対応させてもらいますよ」

「いや、そうじゃなくて、洗うのは自分でやるから、一緒にお風呂に入るうってことよ」

「それはさすがにどうかと思いますか？」

「いいじゃん。さ、行こう。早く行かないと、ユラちゃんが寝ちゃう」

みんながユラを見つめると、目が半分閉じられていた。

「寝ちゃいそうですね。行きましょう」

サファイーナがユラを立たせ、みんなで浴室に向かう。王族の男三人も男湯へ移動した。

「おっふるー！」

「モリーおねえちゃん、はしつたらだめなんだよ？」

「サファイー、スタイルいいなー」

「チハル、それを言うなら、ロイロのスタイルの方がいいわよ」

「なんじゃ？ 体の形なんぞどうにでもなろう？」

五人は裸になり、浴室に入る。そして、千春が口を開いた。

「ロイロの人化ってスキルなんだよね。スタイル変えたりできるの？」

「いや、この見た目は、儂むがこの世界に転生したときの最初の体じゃ」

「へー、最初は人間だったんだ」

「うむ。魔法で見た目も変えられるが、あまり意味もないでな」

みんなで体を洗い、湯船に浸かる。千春は目を閉じてお風呂を堪能たんのうする。

「はあぁ〜気持ちいい」

「んあああ！ 風呂も久しぶりじゃー！ 気持ちいいのおう！」

「ドラゴンがお風呂とか想像つかないよねえ」

「それでもないぞ？ 温泉が湧いておるところで、たまに浸かっておったわ」

「それいいな、今度連れて行ってよ」

「構わんが熱いぞ？ 人が入ると茹ゆで上がるぞ」

「遠慮するわ」

「チハルおねえちゃん、いつしよにねるの？」

ユラの質問を受け、千春はサファイーナを見る。

「サファイー、寝室はどうなってるの？」

「チハルの部屋は王族の寝室ですので、ユラと一緒に寝てもまだ広いですよ」

千春は頷うなづき、今度はロイロに視線を向ける。

「ロイロも一緒に寝る？」

「ベッドか、何百年ぶりじゃるな。一緒にさせてもらおうか」

「サファイーたちは？」

「侍女たちの寝室がそれぞれありますので大丈夫ですよ」

「こんだけ大きな別荘だからあるよね」

五人はゆっくり湯に浸かった後、それぞれ寝室に向かう。

「さすがに外も静かになったねえ」

寝室は二階にあり、千春が窓から下を覗くと、兵士や近侍が夕食の片づけをしていた。それを見ながら、彼女は呟く。

「初めての遠出だったけど楽しかったな」

「儂がいるんじや、もつと遠いところも連れていつてやるぞ」

「ユラもいきたーい」

「成獣サイズなら、みんなでロイロに乗れる？」

「乗らずとも、儂が馬車を運ばいいじやろ」

「あれを持てるの？」

「造作もないわ。なんなら、帰りは儂が運んで王国に戻るか？」

「おおー！ つて、ドラゴンが王国に飛んでいったら大騒ぎにならない？」

「逆に最初に見せておいた方がいいのではないか？ どうせ隠すつもりもないじやろ？」

「んー、そこはハルト兄様に相談するかー。あ、ユラちゃん眠そう」

千春は、目が半分閉じられているユラの手を取り、ベッドに連れていく。

「さて、疲れたし、私も寝るかあ」

「チハルおねえちゃんロイロおねえちゃんおやすみなさいい……すうすう」

「ユラと言ったか、可愛いものう」

「うん、それじゃロイロ、お休み」

「んむ、いい夢を」

三人は横になり眠りに就いた。

★

「んー！ ……ん？ ロイロがいない」

千春が起きると、ロイロがベッドにいなかった、横にはまだユラが寝ている。

「ぐおおお……」

「んんんっ!?」

いびきが聞こえたのでベッドを降りてみれば、反対側の床で大の字で寝ているロイロがいた。

「寝相悪いな！」

「んぐあ？ おお……おお？ ここはどこじや」

「なーに寝ぼけてんのロイロ」

「おおチハル。ああ、思い出したわ。ベッドが柔らかかすぎるから床で寝たんじゃった」

「あー落ちたとかじゃないんだ」

「うむ、もう少少こう、藁わらくらしいの硬さが欲しいのー」

「ベッドで寝てたら慣れるんじゃない？」

「そうかの。まあ、慣れなければ、また床で寝ればいいからの」

二人はケラケラ笑いながらユラを起こし着替える。すると、コンコンコンとドアがノックされた。  
「誰か来たね」

「サファイーおねえちゃんだよ」

「モリーもおるのう」

「ユラちゃんもロイロも、なんで外にいる人わかんよ」

「あしおとでわかるよ？」

「気配と魔力でわかるのう」

「……護衛いらさないじゃん。サファイー、入っ方がいいよー」

千春がそう言うと、サファイーナとモリアンが入ってきた。

「早いですね。もう準備が終わってるじゃないですか」

「サファイー、そう？ 普通に目が覚めたからねえ」

「おはようございます、チハルさんユラちゃん、ロイロ……さん？ ちゃん？」

「なんじゃモリー、儂わしのことはロイロでいいぞ」

「モリアン、陛下に相談後のことになるでしょうけど、『様』をつけなさいね。私たちだけのときは『さん』でいいと思いますよ」

「はーい。わかりました」

モリアンがサファイーナに頷く。

それから、みんなで別荘のリビングに移動すると、ライリーが本を読んでいた。

「おはようライリー、二人は？」

「多分まだ寝てますね。ハルト兄様の方に執事が行きましたので、すぐ起きてこられますよ」

「フィンレーは？」

「まだ起こしてません。朝食前に起こしますから」

「ライリーはしっかりしてるなー」

「お姉さまほどではありませんよ」

ニコリと千春に笑いかけてくるライリー。

「……サファイー、抱きついていいかな(ボソツ)」

「……わかります、いいと思いますよ(ボソツ)」

しかし、実行に移す前に、エンハルトがやってきた。

「おはようチハル、早いな」

「おはようございます、ハルト兄様（チツ）」

「ん？ どうした？」

「いいえ、朝ごはんどうしましょうか？」

「侍女と料理人が準備してくれている。それまで座ってのんびりしてくれ」

エンハルトは千春に告げると、そのまま外に出ていってしまった。

「サファイア、ここに料理人いたの？」

「いますよ。逆になぜいないと思うんですか。王族が泊まりで来ているんですよ？」

「……そうでした」

朝食をゆっくり食べてから再びリビングで寛いでいると、エンハルトとエーデルが入ってくる。

「チハル、昼頃町を出る予定なんだが、町で何か食べていくだろう？」

「んー、そのことなんだけどさ。ロイロが馬車を持って王国まで飛んでいこうかって言っただけど、どうする？」

「は？」

「チハル様、それはどういった……」

エンハルトは面食らい、エーデルも困惑した様子で問いかける。

「そのまんま。レイクサーペントを捕まえてきたときの大きさのドラゴンになれば、馬車を持っていけるってさ」

「ちょっと待ってくれ……」

エンハルトがエーデルに相談している横で、千春とロイロは笑っていた。

やがて話し合いを終えたエンハルトが、ロイロに言う。

「ロイロ、王族の馬車は重いが大丈夫か？」

「大丈夫じゃ。飛ぶと言つても、魔法じゃから。儂より大きいと面倒じゃが馬車くらいなら軽いわ」

「……子供が多いから乗れるか。王族五人と侍女と執事、エーデルも乗るとして……」

ここで、千春が話に入ってきた。

「ロイロ、私とユラは背中に乗れる？」

「ああ、大丈夫じゃ」

「それじゃ、馬車にサファイアとモリーも乗せて……あと荷物は全部アイテムボックスに入れておくよ」

「わかった、それじゃあ準備してくる。少し待っていてくれ」

エンハルトは頷き、エーデルとともにまた外に出ていった。

「サファイア、外のコンロとか回収してこようか」

「そうですね、見た感じ掃除も終わってるようですよ」

千春とサファイアが外に出ると、コンロなどは綺麗に片づけられ纏められていた。

「おー、こりゃ楽だ」

「私はこちらの荷物を入れておきますね」

二人は纏められた自分たちの荷物をアイテムボックスに入れていく。

「エーデルさん、これは？」

千春は、そばにいたエーデルに、纏められた荷物の横にあるレイクサーペントの皮や骨を指差した。

「チハル様の荷物になります」

「皮とかいらないんだけど」

「冒険者ギルドか商業ギルドに卸せばお金になります。結構貴重なランクの魔物なので、喜ばれますよ」

「へえ。それじゃ、ギルド長のメイソンさんにでもあげるかあ」

千春は皮や骨もアイテムボックスに入れていった。

「チハル様、あとこちらを」

エーデルが魔石を差し出した。

「おー！ 綺麗な石！」

「はい、レイクサーペントから出てきました。これを魔導士団の方にお渡しすれば、魔道具を作ってくれますよ」

「ありがとうございます」

千春はそれもアイテムボックスに入れた。そこへ、エンハルトの声がする。

「チハル、みんなの準備はできたようだが、出るにはまだ早いのか？」

「いや、ちよつと気になることがあつてね。早く帰れるなら帰つところか」

「どうした、何が気になるんだ？」

「昨日お父さんが持ってきたお酒を見た？」

「……ああ、そういえば、昨日、朝の湯浴みるときに父上とタイキ様が飲むと言ってたな。帰るか」  
エンハルトと千春は昨日の朝を思い出し、今日も同じように酔っているだろうと思った。

というわけで、他の面々も外に出てきた。

「ロイロ、それじゃお願いできる？」

『任せろ、チハル』

ロイロは成獣サイズのドラゴンになった。

『よし、それじゃあみんな乗り込むがいい』

「うわあ、ロイロの上は高いなあ、ユラちゃん怖くない？」

「うん、だいじょうぶ！」

千春とユラが背に、他の者たちが馬車に乗り込んだのを確認すると、ロイロは馬車を後ろ足で掴み、軽く飛ばたく。するとふわりと浮き上がった。

「鳥が飛ぶような感じじゃないんだね」

千春がロイロに言う。

『風魔法と重力遮断じゃ』

「あー。だから、重さはあんまり関係ないのか」

『だが、大きすぎると風の影響があるからの。小さいに越したことはない』  
ある程度の高さまで行くと、ロイロは前進を始めた。

「方向わかるの？」

『ハルトに聞いた。あっちじゃろ』

北の方向を向いて、ロイロは飛ぶ。

「すごい！ おねえちゃん！ とおくまで見えるよ！」

「すごいねー！ こんなに高いのにあんまり怖くないね。ロイロががちりしてるからかなー」

『はっはっは！ なかなか肝が据わつとるの！』

しかし馬車の中では「うおお！」「きゃあああ！」と悲鳴が聞こえていた。もちろん無視である。

### 第3話 二日酔い再び！

「王都が見えてきた！ 速いな！」

『これでもゆっくり飛んでおるぞ』

「うわー。おうとつてひろいんだねー」

「それじゃ、あの一番大きな建物、お城に飛んでー」

『了解じゃー』

ロイロはバサバサと高度を下げつつ、お城の広場へ向かった。

「あー広場に兵士たちが出てきた」

『そりゃ出るじゃろ』

「まあ、王族の馬車だし、攻撃はされないでしょ」

ロイロはゆっくり馬車を降ろし、そして首を地面に寄せて千春とユラも降ろした。

「チハル王女殿下！」

近づいてきた第二騎士団小隊長のヘンリーが声を上げた。

「あ、ヘンリーさん、ただいまー」

「こ！ このド、ドラゴンは!？」

「私のペットだよ」

『だれがペットじゃ』

「んじゃ、なんて言うのよ」

『……んー、この姿だと思いつかん』

ロイロと千春が話をしていると、馬車から王族が降りてきた。それを見て、ヘンリーが再び声を

上げる。

「殿下！ エーデル殿！」

「出迎えご苦労。大丈夫だ、危険はない」

そう言ったエンハルトがロイロを見ると、ちょうどドラゴンから人型に変わるところだった。

「ヘンリー、父上のところへ行く」

「はっ！」

「エーデル、ここは任せる」

「了解しました」

エンハルトは千春とロイロに目を向けた。

「チハルトとロイロもついてきてくれ」

「はいよー」

「ふむ」

三人は城に入り、国王エイダンの執務室に向かう。執務室の前に兵士がいた。

「父上は？」

「まだ自室にいらっしやいます」

「やっぱりか」

クックククと笑いながら、エンハルトは千春に目で合図する。

「しゃーない、お父様の部屋に行きましょう」

「そうだな」

三人はエイダンの部屋に向かう。後ろには、いつの間にかサフィーナもついてきていた。

「父上はおられるか」

「はい、少々お待ちください」

エンハルトと千春を見た執事長のセバスが、すぐに中にお伺いを立てる。

「どうぞ」

許可が出たようで、セバスチャンが千春たちを部屋の中へ招き入れた。案の定、エイダンはソ

ファーでうめいている。

「お父様、ご機嫌麗しく……ないですね」

「チハルか、すまん」

「はい、手を出してください……『アンチドート』」

「はあ、チハルの魔法はよく効くのう」

「もう。昨日言ったのに、どれだけ飲んだんですか」

「覚えとらんのう。ニホンシユとシヨウチュウを空けたところまでは覚えとる」

「十分です」

「外が騒がしかったが、お前たちが帰ってきたからか？」

この質問には、千春ではなくエンハルトが答えた。

「その件ですが、父上にお伝えすることがあります」

「ふむ、聞こうか」

エンハルトは頷くと、湖畔であったことを説明した。

「ドラゴンがチハルトと契約、チハルトは女神に気に入られ聖女、そして女神を呼べる……か」

「はい、概ねそういうことです」

「それで、クレアからここまで馬車を運んでくれた、そのドラゴンが——」

エイダンは、チラッとロイロを見る。

「儂じゃ。よろしく頼むぞ、国王よ」

「はあ、それは構わんのだが、情報が多すぎてなあ」

「ごはんを食べるときに一人増えるくらいで、普段と変わりませんって、お父様」

ケラケラ笑いながら、千春はエイダンに言う。

「たまにもう一人増えるかもしれませんが」

「女神か」

「はい！」

「……はあ」

エイダンはため息をつく。そこへ、エンハルトが口を開いた。

「報告は以上です、ロイロはチハルトとともに過ごしますので、立場的なことだけ今後どうするかを聞ければと思います」

「わかった。事が事だけにすぐに答えは出せん。メグとも相談してからになるからな」

「わかりました、チハルト、ロイロ行こうか」

「お父様、お母様とお父さんはどれくらい飲みました？」

部屋を出る前に、千春はエイダンに尋ねた。

「覚えておらんが、同じくらい飲んだのう」

「ハルト兄様」

「ああ、ここからだ、先にタイキ様だな」

「ではお父様、失礼いたしますね」

部屋を出た千春はエンハルトと別れ、サフィーナの案内でロイロとともに大樹の客間へ行く。

「おはよう！ お父さん！！！」

「うぐうあ」

やはり大樹もベッドでうめいていた。

「はーい座ってー……『アンチドート』」

「ありがとう。はあ、助かったよ」

「もー、あんだけ言ったのにー」

「楽しかったからねえ。千春は楽しかったかい？ 帰ってくるの早かったけど」

「うん！ 楽しかったよー！ ドラゴンや女神様とお友達になったしね！」

「……へ？」

「それじゃ、お母様のところに行ってくるねー」

「ちよ？ 千春？」

ニコニコと笑いながら手を振って部屋を出た千春は、王妃マルグリットの部屋へ向かう。

「お母様はいらっしゃいますか？」

「はい、お入りください」

付き人のアルベルがすぐに中に入れてくれた。

「お母様、ただいま帰りました」

「おかえり。チハル、向こうは楽しかった？」

「はい。お母様、二日酔い……ですよね？」

「ええ」

笑顔で答えるマルグリットは、どう見ても二日酔いしているとは思えない。

それでも、千春はマルグリットの手を取り、魔法をかける。

「……『アンチドート』」

「はあ……ありがとう、チハル」

「やっぱり無理してたんですねえ」

「ちよっと限界だったわ」

「無理しないでください」

「それで、後ろにいる子は誰？」

マルグリットは、千春の後ろに立っているロイロに目を向けた。

「あーこの子はドラゴンで、今スキルで人化しているロイロちゃんです」

「チハルと契約をし、ともに生きることになった。よろしく頼むぞ、王妃よ」

「んー、まだ酔ってるのかしら？」

「酔ってませんよー」

「チハルは向こうで何をしていたの？」

「バーベキューしてたら、匂いに釣られてロイロが来て、ごはん食べさせて名前をつけたら契約しちゃいました」

千春はテヘペロッと、ワザとらしくマルグリットに笑顔を見せる。

「それで？ その顔だとまだ何かしてるでしょ」

「……はい、ロイロが女神様を呼んで友達になって……あ、アイトネって言うんですけどね、呼べるようになりました。お菓子あるとき限定ですけど。あと聖女の称号を貰っちゃいました」

「……はあ、どうしたらいいかわからないときって、頭が真っ白になるのねえ。エリーナ、お茶を

淹れてちょうだい、すぐく濃くしてね」

マルグリットはソファーに座り、目を瞑った。

「お母様、朝食は？」

「食べてないわ。さすがに食欲がなかったもの」

「それじゃ、何か出しましょうか」

「あら、そうね。気分もよくなったし、いただくかしら」

千春はアイテムボックスからルノアーの作ったケーキを出す。

「ロイロも食べる？」

「食べるぞ」

「そういえば、ロイロ。神託ってどうやるの？」

「アイトネを思い出しながら呼びかけてみる。返事があるじゃろ」

千春は頷き、早速実行する。

（……アイトネーもしもーし）

『何ー？ チハル、あ、ケーキじゃない！ 呼んでくれたのね♪』

不意にアイトネが千春の横に現れた。

「お母様、この人……？ がアイトネちゃん、女神様ですよ」

『あら、この国の王妃ね。チハルのお友達のアイトネよ。よろしくね♪』

マルグリットは固まり、付き人のエリーナもお茶を注ぐのを忘れて動きを止めてしまった。エリーナに代わり、サフィーナがお茶とケーキをみんなに配った。そして、千春を挟んでアイトネとロイロもマルグリットと向かいあわせてソファーに座り、ケーキを頬張る。

『美味し〜♪』

「このケーキも美味しいのう！」

「美味しいねえ」

サフィーナは苦笑いしながらお茶を注ぐ。エリーナとマルグリットはまだ固まったままだった。

「ところでアイトネ、なんで聖女なんて称号つけてんの？」

『神託スキルを最高まで上げるとつくわよ？』

「なに、『当たり前じゃない』みたいない方してるの？ 困るんですけどー」

『困ることなんてある？ 神託が使えるだけじゃない。チハルからの声を確実に聞くなら、最高レベルにしておかないとねえ。ケーキ食べそびれるじゃない』

「やっぱりケーキかい！ また教会がめんどくさいこと言ってきたらどうするのよ」

『教会って、あのホウラーク教会っていうところ？』

「そう。やっぱりアイトネを信仰してるの？」

『そうね、この世界の神は私だけだしねえ。まあ、邪神とか、いもしない神を祀るところもあるけど』  
アイトネは二個目のケーキを口に頬張りながら、千春に答える。

「いいの？ 存在しない神の信仰とか」

『それが心の拠りどころになるのならいいんじゃない。別に私は信仰心集めてるわけじゃないし』

「ふーん、邪神とかいないんだ」

『邪神そのものはたまに生まれるわよ』

「いるのか！ なに？ そのときは聖女とか勇者とか呼ぶの？」

『なんでそんな面倒なことする必要があるのよ。私が消し飛ばすわよ』

「私の中のファンタジーが崩れていく……」

千春はうなだれた。

『神って名乗って私のテリトリーに来たら、タダで済ますわけないでしょう。他の管理者だってそうするわよ。信仰心を集めてる管理者は、神の名で勇者を連れてきて討伐させることもあるけどね』『うわあ……聞きたくない情報ありがとう。でも、昔はこの世界にも勇者がいたって聞いたよ？』『チハルの称号と一緒に、一定のスキルが最高レベルになるとつくのよ。だから、別に何かしないといけないとかはないわ。それで、教会がなんですって？』

「あ、そうそう。私を聖女として祭り上げようとしたの。まあ、聖女になっちゃったわけだけど」

『あの子たちは私を祀ってるくせに、信仰心ないのよね。ちょっと天罰落としちゃおうかしら』

「天罰って何するの？」

『教会の本部があるホウラーク教国を消滅させるとか？』

「やめてあげて。それって、管理者のルールにひっかからないの？」

『私の名を使って私を怒らせたら範囲内よ。教国一帯を消滅させてもセーフ！』

「やーめーてー」

『次に何か言ってきたら呼びなさいよ。私から言ったら、文句も言わないでしょ』

「それはありがたい！ そんなときは呼ぶね」

『美味しいお菓子も用意していてね』

「とっておきを準備しとくよ」

千春とアイトネは悪い顔をしながら笑っていた。そこへ、ロイロが口を開く。

「儂が一発プレスかましてやろうか？」

『「やめなよ」』

「なんじゃ、ドラゴンの気まぐれなんぞどこにもあるぞ？ 誰のせいにもならんぞ？」

「一方的な殺戮はちよつと……」

『人間も集まれば、ドラゴンだって怪我をさせられるわよ』

「そういう問題じゃないって」

ケラケラ笑いつつ、アイトネは次のケーキを手取る。

「あ、あの女神様？」

ここでマルグリットがやっと現実に戻ってきた。

立ち読みサンプル  
はここまで

『何かしら？ 王妃さん』

「チハルが聖女というのは本当のようですが、宿命や何かしらの目的などはないのですか？」

『ないわよ？ 美味しいお菓子を持ってきてくれたら一緒にお茶するために、私を呼べるようにしただけですもの』

「はあ……よかった」

『チハルは本当に愛されているのね、羨ましいわ』

「お母様、ありがとうございます」

「チハルがこの世界の業を背負うようなことがあれば、私は耐えられませんが」

『心配しなくても大丈夫よ。この世界の業も未来も私が背負ってますもの』

「そうじゃ。儂がこの世界にいるのも、アイトネがこの世界を平穩にしておるからじゃ。ここまで安定した世界はそうそうないからのう」

『あら、嬉しいこと言うじゃない』

アイトネは紅茶を飲み、ロイロに微笑む。

『それじゃご馳走になったし、私は戻るわね。教会の件は何かあったら呼びなさいね。なんなら、今から天罰でも』

「大丈夫！ そのとき呼ぶから！！！」

『あら、そう？ それじゃまた呼んでね〜♪』

アイトネはフツと消えた。

「ケーキで吹き飛ばす教団……恐ろしい」

「まあ半分冗談じゃからな」

「半分本気かい」

「なんなら、儂がブレスかましてくるぞ？」

「やめい！」

「はっはっはっは！」

女神が帰り、千春とロイロが漫才をやっている姿を、マルグリットはホツとしたような呆れたような気分で見つめていた。

第4話 大掃除！

「はあ、ビックリしすぎて冷静になれたわ。それで、チハルの今日の予定は？」

マルグリットは改めて千春に問いかけた。

「一度向こうに戻って、スマホの通知を確認して大掃除します」

「大掃除？」